Newsweek

WORLD AFFAIRS

アフガン

'I Yelled at Them to Stop'

米軍の知られざる蛮行

現地で活動する特殊部隊が
一般兵士の「暴走」を本誌に告発
テロリスト掃討作戦で地元住民を恐怖のどん底に

コリン・ソロウェイ

8月のある日、米軍の特殊部隊「Aチーム」がシャヒコト峡谷のみすぼらしい農家を訪れた。米軍は当時、アフガニスタン東部に潜伏するアルカイダとタリバンの残党を追跡する「山狩り作戦」を実施中だった。

家長の年老いた男は、女たちを裏の部屋に隠してから戸を開けた。Aチームの隊員が武器はあるかと尋ねると、100年近く前の猟銃を自慢げに見せた。Aチームが女たちを見ないように注意しながら捜索を終えると、男はお茶を振る舞った。Aチームは礼を言い、次の家の捜索に向かった。

だが男の家から少し離れたとき、隊長が振り返ると、第82空挺師団の兵士6人が同じ家に突入しようとしていた。「やめろと叫んだ。でも、連中は家の戸を蹴破って中に入った」

驚いて逃げようとした男を、兵士の一人が地面に押し倒した。隊長が駆けつけたとき、第82空挺師団の兵士たちは女性たちの身体検査を始めようとしていた。

隊長は兵士を追い返したが、農民の一家はひどいショックを受けていた。「女たちはヒステリックに叫び、侮辱を受けた家長の男は涙を流していた」と、マイクとだけ本誌に名乗った隊長は振り返る。

地元との信頼関係を破壊

公式発表によると、「山狩り作戦」は大成功だったとされている。だが米軍の特殊部隊と地元のアフガン人に言わせれば、ひどい失敗だった。この作戦に参加した米兵は村人を恐怖に陥れ、特殊部隊が築いた地域社会との信頼関係を破壊したと、目撃者は語る。

「山狩り作戦の終了後、ホウストで石を投げられた。アフガンに来て初めてのことだ」と、作戦の半年

前からこの地域にいるグリーンベレーの隊員は言う。
　第82空挺師団は、兵士の行動に問題はなかったと主張している。だが特殊部隊からの批判は、対テロ戦争のような「低強度紛争」に対する米軍の戦略に深刻な疑問を投げかけるものだ。
　シャヒコト峡谷は今年3月、アルカイダとタリバンが米軍と最後の大規模戦闘を繰り広げた場所だ。それ以来、アフガン東部のパクティア州とホウスト州には50人前後の特殊部隊が展開している。
　山狩り作戦開始の直前、2週間にわたって同行取材した本誌記者の印象では、村人の信頼と協力を得ようとする特殊部隊の試みはおおむね成功を収めていた。「あのアメリカ人はいい連中だ」と、シャヒコト峡谷の中心地ゾルマトの地区行政官ジャン・バズ・サディキは言う。「彼らは民家に押し入ったり、民衆を脅したりしない」
　だが8月19日、米軍は第82空挺師団と第3大隊の兵士600人前後を新たに送り込んだ。
　「あいつらはクレージーだった」と、ある特殊部隊の下士官は証言する。別の隊員も言う。「あらゆる民家の戸口の奥にビンラディンが潜んでいるといわんばかりの振る舞いだった。民間人を相手にやることじゃない」
　現地の特殊部隊によると、山狩り作戦以降、地元住民からの情報提供がぴたりとやんだという。

上層部の焦りが原因？

　柔軟な対応が苦手な通常部隊は、粘り強い努力が必要な低強度紛争に向いていないと、特殊部隊の隊員は語る。ある士官はこう言い放った。「通常部隊は通常の発想しかできない。悪党が民衆の中に紛れ込んでいる場合は、それでは通用しない」
　Aチームが住民と信頼関係を築きながらテロリストを追跡している間、第82空挺師団を含む通常部隊は基地内にとめおかれ、早く任務に出たくてうずうずしていた。
　だが、シャヒコトに通常部隊の仕事はなかった。「第82空挺師団は優秀な部隊だ。しかし、彼らが受けた訓練は敵を殺すためのもの。あそこに『敵』はいなかった」と、ある特殊部隊の隊員は言う。
　タリバンの残党は3月の「アナコンダ作戦」で山岳部の洞窟を追われ、住民の間に紛れ込んだ。以来、アフガンでの戦闘は事実上のゲリラ戦と化し、小人数で行動するタリバンやアルカイダを相手にする低強度紛争となった。
　特殊部隊は、まさにそのための組織だ。たとえば、M4ライフルや軽機関銃で武装した10人以下の下士官を准士官と大尉各1人が統率するAチーム。彼らは現地の習慣や感情になじむ訓練を積んでおり、作戦行動に出かけるときは必ず通訳を同行する。
　だがワシントンでは、ウサマ・ビンラディンやムハマド・オマルを取り逃がしたことを問題視する空気が強い。ドナルド・ラムズフェルド国防長官は今年7月、「大物」を捕らえ損なったとして軍首脳を叱責したとされる。こうした上層部のいらだちが、山狩り作戦につながったようだ。
　「手当たり次第にやってみれば、何かが起きるという発想だ」と、ある西側外交官は言う。「確かに何かは起きるだろうが、ねらった成果が上がるとはかぎらない」

米軍は過ちを正せるか

村人たちの不満は目に見えて高まっている。地区行政官のサディキの下には、住民の抗議が殺到しているという。マルザクという村では、第82空挺師団の兵士が精神障害者の男性を腹ばいにして手錠をかけ、頭に銃を突きつけて写真を撮り合ったという証言もある。

山狩り作戦の終了後、2チームの特殊部隊が「事後検証」報告書を作成した。消息筋によると、この報告書には問題行動の目撃談が詳細に記録され、今後の予防策が提案されているという（本誌は報告書を入手していない）。

この報告書は猛反発を呼んだ。第3大隊の兵士が参加したタスクフォース「パンサー」のジェームズ・ハギンズ司令官はこう主張する。「問題行動が100%なかったとは言わないが、私の知るかぎり証拠はない」

報告書を作成した士官は、機密情報を本誌に漏洩したとして内部調査の対象になっている。

ハギンズは疑惑を否定する一方で、今後は兵士の「異文化理解」の向上や、アフガン人女性の身体検査を担当する女性憲兵の導入、家宅捜索で破壊された鍵の代替品の供給を進めたいと語る。

だが特殊部隊の間では、すでに住民との信頼関係は大きく傷ついてしまったという声が出ている。今後も同様の作戦が計画されていると聞いた下士官は、「そうなったらおしまいだ」と言った。

それでもAチームのマイクは、通常部隊との協力を望んでいる。「自分たちで全部やるから通常部隊は不要だという特殊部隊の隊員もいる。でも、それは不可能だ」

マイクは、Aチームと通常部隊の歩兵がペアを組むのがベストだと考えている。「私たちには、戦闘能力と火力をもつ通常部隊の支援が必要だ。彼らも、特殊部隊の経験や技術を必要としている」

米軍が山狩り作戦の失敗から学び、過ちを正すこと――特殊部隊の隊員はそれを願っている。

ニューズウィーク日本版

2002年10月16日号　P.34

©2003 Newsweek,Inc. ©2003 Hankyu Communications Co., Ltd. 無断転載・複製を禁じます。

閉じる